

悲しみと共にある救い

ルカによる福音書18:18～27

18:18 ある議員がイエスに、「善い先生、何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と尋ねた。18:19 イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。18:20『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証するな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」18:21 すると議員は、「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。18:22 これを聞いて、イエスは言われた。「あなたに欠けているものがまだ一つある。持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」18:23 しかし、その人はこれを聞いて非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。18:24 イエスは、議員が非常に悲しむのを見て、言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。18:25 金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」18:26 これを聞いた人々が、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言うと、18:27 イエスは、「人間にはできないことも、神にはできる」と言われた。

今日は23節の言葉に注目したいと思います。「その人はこれを聞いて非常に悲しんだ。」というところです。さて、この人は救われなかったのでしょうか。イエスの伝道は失敗だったのでしょうか。実はこれとほぼ同じ内容の箇所がマルコによる福音書の10章17節以下に出てきます。ほぼ同じとはいえ、微妙に違っています。「非常に悲しんだ」はマルコでは、「悲しみながら立ち去った。」となっています。ルカはマルコを参考にして書いていますから、この「立ち去った」をルカは意図的に削除したのです。なぜでしょうか。もしかしたらこの金持ちについて、ルカは別の情報を持っていたのかもしれませんが、似たようではあるが別人のことを考えていたのかもしれませんが、それはあくまで想像で確かな事は分かりません。ただ、はっきりしている事は、ルカによればこの金持ちは、立ち去ったとはいえない、とどまったと言うべきだと考えたということです。ここでこの金持ちは、悲しんでいます。悲しみとは、喪失の感情です。大切なものを手放さなければならないときの感情です。この金持ちは財産を手放す決心をした。だからこそ悲しまなければならなかった。そう考えるのが自然です。

それは非常に大きな悲しみだったと思います。この時代の金持ちは、たくさんの雇い人を抱えていました。みな生活に責任があるのです。ひょっとしたら幼い頃からかわいがってくれた爺や、婆や、幼なじみと別れなければならなかったかもしれません。「金の切れ目は縁の切れ目」と申します。彼が無一文になったとき、それまで親しくしていた人々は去って行くでしょう。非難、抽象、無理解に遭うでしょう。大変につらい気持ちを抱えないことには、ここでイエスが教えた事は実行できません。

悲しみを抱える。これがイエスの言う天国にはついてくるのです。「今日あなたは私と共にパラダイスにいる。」(23:43)とイエスがおっしゃったように、ルカにとって神の国とは、「今ここ」で、実現するものでした。ですから、この金持ちが貧しい人々への施しをしたときに、そこに神の国は実現しているのです。それでも彼は心の半分引き裂かれる思いを抱えている。

けれどももう一方で、彼にその引き裂かれる思いがあればこそ、なし得ることもあります。それは共感です。無一物の不安。別れの悲しみ。相手にされなくなる孤立感。これらは皆貧しい人々が

体験していることでした。彼は、自分の悲しみを、回避せず、無視せず、静かに抱えることで、同じように苦しむ人々の悲しみを、回避せず、無視せず、静かに分かりあう、分かちあう仲間となることが出来る人になるのです。

彼が「子どもの頃から守ってきた」(18:21)と言うのは十戒のことです。その要点は、神を愛し人を愛するという教えです。彼は「やってきた」、「できている」と言う。けれども人々の悲しみの深みを理解するまでにはいたっていませんでした。だからこそこの悲しみが必要だったのです。彼は自分の悲しみを見つめることで、人々をより深く愛することができるようになるのです。

イエスはこの人に対してどのような態度をとられたのでしょうか。イエスが彼に共感したとは明記されてはいません。でも、どうでしょうか。25節、「金持ちが・・・らくだが・・・」とは一般的な法則を述べているのではなく、「どんなに大変なことか」という共感、祈るような思いがにじみ出ていないでしょうか。私はそのように解釈したいと思います。神の国はイエスがおられるところにある、というのがイエスの教えでした。そしてイエスのおられるところには、苦しみを分かりあう、分かちあうということがあるのです。

「えっ、天国に入る事は苦しむことなの？」当時は、金持ちになるのは神の祝福と考えられていました。苦しみは呪いでこそあれ、祝福だなんて・・・。金持ちも救われないとするなら、誰が救われるのか(26節)。イエスは祈るような気持ちで、いやまさに祈りながら、この金持ちが、この強烈な悲しみを宿しながら生きるという道・・・らくだが針の穴を通る道といわざるを得ないほど、どんなに大変な道であるかを、イエスご自身知る者として・・・この道を何とか歩みきってほしいと願われたことでしょう。イエスは、「分かるよその気持ち」なんていう気慰みは言いません。この青年に向かっては何もおっしゃいません。「どんなに大変なことか」と弟子たちに向かって慨嘆するのみです。それはご自分がその道を、ドロローサ、十字架の道を、知っておられるからです。とてもできたものではない、「しかし神にはできる。」とおっしゃいました。「なんと困難なことか」(24節)。しかし彼にはできるとイエスはおっしゃるのです。なぜか？ それは神ご自身が人と共におられるからです。どんな苦しみも私たちは神と共に負っている。私たちが一人ではできないことであっても、神がおられるところでは、苦しみを分かりあい、分かちあうということができるようになるの。そこに神の国、天国があるのです。